

令和7年度 全国学力・学習状況調査結果のお知らせ
大月市内小中学校の状況について

大月市教育委員会

4月17日に「全国学力・学習状況調査」が実施されました。調査結果を分析しましたのでお知らせします。

本調査は、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てることを目的としています。この調査は小学校6年生と中学校3年生を対象に実施されました。

内容は教科に関する調査(小学校 国語・算数・理科、中学校 国語・数学・理科)と質問紙調査(学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等)です。

市内小中学校では、自校の結果を分析し、指導方法の改善等を行っています。更に調査を受けた児童生徒とその保護者の皆様には、個々の良いところや課題点、努力点等を説明し、今後の学力向上に向けて家庭との連携を図るように努めています。

1 教科に関する調査(国語 算数・数学 理科)について

(1)全体の結果と状況 指導改善のポイント

	市内小学校の平均正答率	市内中学校の平均正答率
国語	県平均をやや下回っている	県平均とほぼ同等
算数・数学	県平均とほぼ同等	県平均とほぼ同等
理科	県平均をやや下回っている	新方式(CBT)によるIRT スコアは 県平均とほぼ同等

※中学校理科はデジタル端末を使いオンラインで出題・解答する新方式(CBT)を初めて導入した。

※IRT(Item Response Theory 項目反応理論)とは、国際的な学力調査(PISA、TIMSS など)や英語資格・検定試験(TOEIC・TOEFL など)で採用されているテスト理論である。この理論を使うと、異なる問題から構成される試験・調査の結果を、同じものさし(尺度)で比較できる。

※IRT スコアとは、IRTに基づいて各設問の正誤パターンの状況から学力を推定し、500を基準にした得点で表すものである。(各教科に CBT・IRT を導入する年 令和7年中学理科、令和8年中学校英語、令和9年国語、算数、数学)

※「県平均とほぼ同等」……平均正答率との差±5%を微差とし、「±5%は、ほぼ同等を意味する」としている。

《 小学校 国語 》 ○平均正答率が高い ●平均正答率が低い

調査問題

- 1 バスの運転士にインタビューをする
- 2 伝統工芸品について推薦するちらしを書く
- 3 複数の資料を読み、分かったことや考えたことをまとめる(言葉の変化)

○情報と情報との関係付けの仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解し使うことができる。

○自分が聞こうとする意図に応じて、話の内容を捉えることができる。

- 時間の経過による言葉の変化や世代による言葉の違いに気付くことができる。
- 目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見付けることができる。
- 目的や意図に応じて、日常生活の中から話題を決め、集めた材料を分類したり関係付けたりして、伝え合う内容を検討することができる。

《指導改善のポイント》

- ・聞くことにおいては、事前に聞くことを具体的に考え、関係する材料を整理しておくことが重要である。聞きたいことについて、自分なりの予想や疑問に感じていることなどを、目的や意図に応じて内容ごとにまとめ、それらを互いに結び付けて関係を明確にできるように指導すると効果的である。

- 図表などを用いて、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができる。

《指導改善のポイント》

- ・図表やグラフを用いた文章と用いていない文章を提示するなどして、図表やグラフの効果を理解できるようにする。その上で、伝えたいことを明確にし、分かりやすく伝えるためには、どのような図表やグラフを用いるとよいかを児童が考えられるように指導する。

- 学年別漢字配当表に示されている漢字を文の中で正しく使うことができるかどうかをみる。

《指導改善のポイント》

- ・漢字を書くことについては、当該学年の前の学年に配当されている漢字を書き、文や文章の中で使おうとする習慣を身に付けるようにするとともに、当該学年に配当されている漢字を漸次書き、文や文章の中で使うようにすることが重要である。

- 事実と感想、意見などとの関係を叙述を基に押さえ、文章全体の構成を捉えて要旨を把握することができる。

《指導改善のポイント》

- ・要旨を把握するためには、書き手が、どのような事実を理由や事例として挙げているのか、どのような意見をもっているのかなどに着目することが重要である。理由や事例を書き出し、書き手の考えを自分の言葉で短くまとめることができるように指導すると効果的である。

《 小学校 算数 》 ○平均正答率が高い ●平均正答率が低い

調査問題

- 1 目的に応じてデータの特徴や傾向を捉えること(野菜)
- 2 図形を構成する要素に着目し図形を考察すること(多角形)
- 3 計算の仕方について統合的・発展的に考察すること(小数と分数)
- 4 日常の事象について伴って変わる二つの数量の関係に着目して考察すること(ハンドソープ)

- 棒グラフから、項目間の関係を読み取ることができる。
- 小数の加法について、数の相対的な大きさを用いて、共通する単位を捉えることができる。
- 異分母の分数の加法の計算をすることができる。
- はかりの目盛りを読むことができる。
- 目的に応じて適切なグラフを選択して出荷量の増減を判断し、その理由を言葉や数を用いて記述できる。

《指導改善のポイント》

・様々なグラフの特徴を理解し、目的に応じて複数のグラフから適切なグラフを選択してデータの特徴や傾向を捉え判断し、その判断の理由を表現できるようにすることが重要である。その際、グラフのどの部分やどの数値に着目したのかを説明するなど、他者に分かりやすく表現できるようにすることが大切である。

●基本図形に分割することができる図形の面積の求め方を、式や言葉を用いて記述できる。

《指導改善のポイント》

・多角形の面積を求める際に、基本図形に分割するなど、面積の求め方を知っている既習の図形を見いだし、面積の求め方を考えることができるようにすることが重要である。

●数直線上で、1の目盛りに着目し、分数を単位分数の幾つ分として捉えることができる。

《指導改善のポイント》

・数直線上の目盛りが表す数を分数で表す際、0から1までが何等分されているのかに着目して、単位分数を捉えることができるようにすることが大切である。その上で、他の目盛りが表す分数を単位分数の幾つ分として考えることができるようにすることも大切である。

●伴って変わる二つの数量の関係に着目し、問題を解決するために必要な数量を見いだし、知りたい数量の大きさの求め方を式や言葉を用いて記述できる。

《指導改善のポイント》

・日常生活の問題解決のために、複数の情報から場面に基づいて必要な数量を見いだし、それらの数量の関係を捉えるとともに、その関係を式や言葉の式に表現できるようにすることが重要である。絵や図などを用いて使いかけのハンドソープの重さには容器の重さも含まれていることを捉えることができるようにすることが大切である。

《 小学校 理科 》 ○平均正答率が高い ●平均正答率が低い

調査問題

- 1 赤玉土の粒の大きさによる水のしみ込み方の違い(地球に関する問題)
- 2 電気の性質を活用したものづくり(エネルギーに関する問題)
- 3 花のつくりや受粉、発芽の条件(生命に関する問題)
- 4 水について調べ、発表する(物質に関する問題)

○身の回りの金属について、電気を通す物、磁石に引き付けられる物があることの知識が身に付いている。

○水が氷に変わる温度を根拠に、オホーツク海の氷の面積が減少した理由を予想し、表現することができる。

○氷がとけてできた水が海に流れていくことの根拠について、理科で学習したことと関連付けて、知識を概念的に理解している。

○「水は温まると体積が増える」を根拠に、海面水位の上昇した理由を予想し、表現することができる。

●赤玉土の粒の大きさによる水のしみ込み方の違いについて、赤玉土の量と水の量を正しく設定した実験の方法を発想し、表現することができる。

《指導改善のポイント》

・条件を制御した実験の方法を発想し、表現するためには、変える条件や変えない条件に着目し、整理しながら実験を計画することが重要である。検証計画の立案で十分な活動時間を設け、条件制御の必要性を確認した上で、予想や仮説を基に、条件を制御した場合の結果の見通しについての話し合い等を行い、児童自ら条件を制御した計画を立てることが大切である。

●電流がつくる磁力について、電磁石の強さは巻数によって変わることの知識が身に付いている。

《指導改善のポイント》

・観察、実験の結果や結論を、図に整理したり、言葉で説明したりするなど、知識と関係付けて理解を深めることが、引き続き大切である。例えば、電磁石の強さは、電流の大きさや導線の巻数によって変わることを考察する際に、「巻数を増やす」などの条件を表す言葉や、「電磁石が強くなる」などの現象を表す言葉を使い分けて説明する学習活動が考えられる。

●ヘチマの花のつくりや受粉についての知識が身に付いている。

《指導改善のポイント》

・理科では、科学的な言葉を使うことが大切である。例えば、花のつくりを観察するときに、図鑑などと照らし合わせておしべやめしべの部位と名称を説明する学習活動、さらに、複数の種類の花を観察し、その共通点としておしべとめしべを見つける学習活動が考えられる。

●顕微鏡を操作し、適切な像にするための技能が身に付いている。

《指導改善のポイント》

・顕微鏡を操作する場面において、操作方法や手順をただ覚えるだけではなく、「像が視野の中心にない」「ピントが合っていない」などの状態のとき、状態によってどのように操作すれば必要な像が得られるのかなど、様々な状態を想定して実際に操作する学習活動が考えられる。

《 中学校 国語 》 ○平均正答率が高い ●平均正答率が低い

調査問題の解説

- 1 案内文を書く(美術展のちらし)
- 2 スピーチをする(活動のアイデアを発表する)
- 3 文学的な文章を読む(「二人の兄弟」)
- 4 手紙を推敲する(職場体験活動のお礼状)

○自分の考えが明確になるように、論理の展開に注意して、話の構成を工夫することができる。

○文章全体と部分との関係に注意しながら、登場人物の設定の仕方を捉えることができる。

○文章の構成や展開について、根拠を明確にして考えることができる。

○読み手の立場に立って、表記を確かめて、文章を整えることができる。

●目的に応じて、集めた材料を整理し、伝えたいことを明確にすることができる。

《指導改善のポイント》

・案内文など実用的な文章を書く際には、相手や目的に応じて材料を比較しながら、伝えるべき事柄を取捨選択するなど、集めた材料を整理して簡潔に分かりやすく書く必要がある。例えば、同じ行事を案内するウェブページとちらしについて、盛り込む内容を検討する学習活動が考えられる。その際、ウェブページとちらしを比較しながら、それぞれが想定する相手や目的などを具体的に考え、必要な情報を取捨選択することが大切である。

●事象や行為を表す語彙について理解している。

《指導改善のポイント》

・事象や行為、心情を表す語句について理解するためには、動詞や形容詞、形容動詞、名詞、副詞など様々な語句について取り上げ、語句の量を増すとともに、話や文章の中でどのように使用されているかについて考えることが重要である。

●資料や機器を用いて、自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫することができる。

《指導改善のポイント》

・資料や機器を用いて、自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫する際には、伝えたい内容が適切に伝わるよう効果的に資料や機器を活用することが重要である。その際、話の内容を踏まえ、話の要点や

根拠が明らかになっているか、説明が不足していないか、中心となる事柄が強調されているかなど、自分の考えが聞き手に分かりやすく伝わっているかを確認し、資料や機器の使い方について検討することが大切である。

●相手の反応を踏まえながら、自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫することができる。

《指導改善のポイント》

・相手の反応を踏まえながら、自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫する際には、うなずきや表情などの聞き手の反応から、話の受け止め方や理解の状況を捉えることが大切である。自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫するには、聞き手の興味・関心、情報量などを考慮しながら、聞き手に応じた語句を選択したり、話す速度や音量、言葉の調子や間の取り方、言葉遣いなどに注意したりするなどして、相手に分かりやすく伝わるように表現を工夫することが重要である。

《 中学校 数学 》 ○平均正答率が高い ●平均正答率が低い

調査問題

- 1 素数
- 2 文字を用いた式
- 3 外角
- 4 変化の割合
- 5 相対度数
- 6 構想を立てて説明し、統合的・発展的に考察すること(連続する3の倍数の和)
- 7 不確定な事象の起こりやすさを捉え考察し判断すること(じゃんけんカードゲーム)
- 8 日常的な事象における問題について、関数関係に着目し構想を立て考察すること(新しい駅)
- 9 証明を振り返り、統合的・発展的に考察すること(平行四辺形)

○事柄が常に成り立つとは限らないことを説明する場面において、反例をあげることができる。

○必ず起こる事柄の確率について理解している。

○事象を数学的に解釈し、問題解決の方法を数学的に説明することができる。

○証明を振り返り、証明された事柄を基にして、新たに分かる辺や角についての関係を見いだすことができる。

●多角形の外角の意味を理解している。

《指導改善のポイント》

・外角の大きさは 180° と内角の差で求められることを理解できるように指導することが大切である。授業を行う際には、例えば、外角を図に示したり、角の大きさを測ったりする活動を取り入れ、外角の意味を理解できるようにすることが大切である。また、多角形の外角の和の性質など、外角に着目して図形の性質を考察する場面において、外角の意味を再確認することも大切である。

●一次関数 $y=ax+b$ について、変化の割合を基に、 x の増加量に対する y の増加量を求めることができる。

《指導改善のポイント》

・一次関数について、表、式、グラフを関連付けて、 x の値の変化に伴って、 y の値がどのように変化するかを調べる活動を通して、変化の割合の意味や一次関数の変化の割合が一定であることを理解したり、 x の増加量に対する y の増加量を求めたりすることができるように指導することが大切である。

●目的に応じて式を変形したり、その意味を読み取ったりして、事柄が成り立つ理由を説明することができる。

《指導改善のポイント》

・事柄が一般的に成り立つ理由を、構想を立て、文字式や言葉を用いて根拠を明確にして説明できるように

指導することが大切である。授業を行う際には、連続する三つの3の倍数を文字を用いて表して、その和を9×(整数)の形の式に変形すればよいという見通しをもち、計算結果を式変形して説明できるようにすることが大切である。

●ある事柄が成り立つことを構想に基づいて証明することができる。

《指導改善のポイント》

・事柄が成り立つことを証明できるようにするためには、仮定や仮定から導かれる事柄、結論を導くために必要な事柄を明らかにするなどして証明の方針を立て、その方針を基に推論の過程を数学的に表現できるように指導することが大切である。

《 中学校 理科 》 ○平均正答率が高い ●平均正答率が低い

調査問題

- 1 水をテーマに科学的に探究する
- 2 ストロー笛をつくり、音について科学的に探究する
- 3 身の回りの電気回路について科学的に探究する
- 4 ガス警報器の設置場所について科学的に探究する
- 5 ドライアイスの中で燃焼するかどうか科学的に探究する
- 6 スケッチの有用性について考える
- 7 物質を体内に取り入れる体の構造について科学的に探究する
- 8 身近な地域の大地の変化について科学的に探究する
- 9 大気圧について科学的に探究する

○電熱線で水を温める学習場面において、回路の電流・電圧と抵抗や熱量に関する知識及び技能が身に付いている。

○ガス警報器の設置場所が異なる理由を考える学習場面において、実験の様子と、密度に関する知識および技能を関連付けて、それぞれの気体の密度の大小関係を分析して解釈できる。

○気圧について科学的に探究する場面において、状態変化や圧力に関する知識及び技能を基に、予想が反映された振り返りについて問うことで、探究の過程の見通しについて分析して解釈できる。

○気圧に関する身近な事象を問うことで、気圧の知識が概念として身に付いている。

●露頭のどの位置から水が染み出るかを観察する場面において、小学校で学習した知識を基に、地層に関する知識及び技能を関連付けて、地層を構成する粒の大きさとすき間の大きさに着目して分析して解釈できる。

《指導改善のポイント》

・地層を構成する粒の大きさと水のしみ込み方を関連付けて説明することが大切である。指導に当たっては、小学校で学習した知識を基に、地層に関する知識及び技能を関連付けて、地層を構成する粒の大きさとすき間の大きさに着目して分析して解釈する学習場面を設定することが考えられる。また、粒の大きさの異なる地層モデルを用いた実験を通して見いだしたことと、実際の地層とを関係付けて解釈することが重要である。

●塩素の元素記号を問うことで、元素を記号で表すことに関する知識及び技能が身に付いている。

《指導改善のポイント》

・物質やその変化を表現したり理解したりする上で、物質を元素記号で表すことができることを理解し、元素記号の表し方についての知識及び技能を身に付けることは大切である。指導に当たっては、スポーツ飲料

や洗剤等の成分表示の中に元素記号が記載されていることがあることに気付かせ、身の回りの生活の中で元素記号が使われていることを実感させる学習場面を設定することが考えられる。

- 【考察】をより確かなものにするために、音に関する知識及び技能を活用して、変える条件に着目した実験を計画し、予想される実験の結果を適切に説明できる。

《指導改善のポイント》

・理科では、考察の妥当性を高めるために、計画した観察、実験の結果から何が分かればよいのかをはっきりさせてから観察、実験を行うなどして、科学的な探究の過程を振り返り、探究の見通しをもたせることが大切である。指導に当たっては、科学的な探究の見通しをもつために、すぐに観察、実験を行うのではなく、個人やグループなどで「観察、実験の結果から何が分かればよいのか」について、確認して共有するなどの学習場面を設定することが考えられる。その際、比較したり、関係付けたりする対象を明確にして関係性を示したりするなど、適切に表現できるような言語活動の充実も求められる。

- 加熱を伴う実験における実験器具の操作等に関する技能が身に付いている。

《指導改善のポイント》

・火傷をしたときは水ぶくれが破けないように、直ちに患部を冷水で冷やし早急に専門の病院へ行くことを生徒に認識させることは引き続き大切である。また、平素から校医などと十分に連絡をとり、緊急の時にどのように対処すればよいのかについて、具体的に決めたことを生徒と共有しておく、不慮の事故の場合でも、より冷静に対処することができる。指導に当たっては、観察、実験を行う際には、事故の応急処置と対応を繰り返し確認するなどが大切である。また、観察、実験の安全を確保するために、予備実験を行うことが大切である。

(2) 評価の観点と問題形式、無回答(問いに対して解答していない)について

評価の観点は「知識・技能」「思考・判断・表現」、問題形式は「選択式」「短答式」「記述式」となっている。

評価の観点では「思考・判断・表現」、問題形式では「記述式」の問題において、苦手傾向があり、また無回答率が高い傾向である。(これは県内・全国的にも同様の傾向である)

無回答率が高かったのは、

- ・小学校国語では、目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見付けることができるかどうかをみる「記述式」の問題である。
- ・小学校算数では、分数の加法について、共通する単位分数を見だし、加数と被加数が、共通する単位分数の幾つ分かを数や言葉を用いて表す「記述式」の問題である。
- ・小学校理科では、赤玉土の粒の大きさによる水のしみ込み方の違いについて、結果を基に結論を導いた理由を表現することができるかどうかをみる「記述式」の問題である。
- ・中学校国語では、手紙の下書きを見直し、誤って書かれている漢字を見付けて修正する「短答式」の問題である。
- ・中学校数学では、A駅から60.0km地点につくられる新しい駅の運賃がおおよそ何円になるかを求める方法を説明する「記述式」の問題である。
- ・中学校理科では、塩素の元素記号を記述する「短答式」の問題である。

(3) 各学校に於ける主な取組

○ICTの活用

- ・日常的に使用して、ツールとして使いこなすことができるようにしている。Office365 の PowerPoint や Word、Canva などを活用しながら、学習者主体の学習や自由進度学習(「学習計画表」に基づいて自分のペースで教科内容を学び進める学習方法)に取り組んでいる。
- ・一人一台端末を学校生活の多くの場面で活用することが当たり前になっている。授業で容易に使用できる環境を整え、タブレットに触れる場面も日常的に設定している。ICT 機器や学習支援ソフトを活用し、自分で課題を設定し考えをまとめ、発表し交流することで最適な学びと協働的な学びの進展を図っている。
- ・デジタル教科書を有効に活用するとともに、実際に実験をさせることで、植物の成長や、物質の変化などを体験的に学習することができ、学習内容の深い理解と定着を図ることができている。
- ・わかりやすい授業の日常化に努め、学力の定着や思考の多様化を進めている。多くの情報や学習の軌跡などを振り返ったり、友達の考えや発表を共有したりすることができるよう、電子黒板やタブレット端末等の ICT 機器を積極的に活用している。
- ・「AIドリル」の有効活用とその方法を探り、積極的に利活用していく。

○家庭学習

- ・授業の中で家庭学習の取り組み方について指導をしている。実際に授業中に時間をとって、家庭学習ができるように練習をしている。また、漢字のテストについて、期限を設けながら自由進度で計画的に進められるようにしている。
- ・家庭での学習習慣の確立に向けて、「家庭学習の手引き」や「家庭学習チェックシート」での毎回の振り返りと新たな目標設定など、定期的に活用し、個々の自主性を保護者と連携を図りながら取り組みを続けている。
- ・PCの持ち帰り等をこれまで以上に実施し、授業だけでなく、家庭学習での活用も促進する。

○授業

- ・児童の生活と学習内容を結び付けられるような授業展開を行うようにしている。また、そのことから児童が学習課題を見出すことができるようにしている。
- ・自分の意見をまとめるということに課題があるため、様々な教科で自分の意見をノートに書いたり、Office365 の PowerPoint や Word、Canva で共有したりして、取り組む機会を増やしている。
- ・国語と算数を中心に、授業後にまとめの時間をとり、振り返りをしている。児童は今日の授業でわかったことや考えたことを文章に表すことにより思考の整理をし、教師はそれを見て課題を次時の授業や授業改善に生かしている。
- ・語彙を広げるために、国語辞典や漢字辞典を利用する習慣をつけている。低学年時から一人一冊国語辞典を持ち「辞書引き学習」を取り入れ、言葉をしっかり覚えて、書いたり読んだり、使ったりすることができるように指導している。
- ・やまなしスタンダードの7つの視点を取り入れた授業づくりを継続している。1時間の授業課程モデルのように「つかむ」「見通す」「ふかめる」「ひろめる」「まとめる」「ふりかえる」の流れを定着させている。
- ・学年の発達段階に応じた学習規律の確立を目指し、「学習のルール」を作成して学期ごとに振り返りを行い、子どもたちの指導に当たっている。
- ・授業での漢字・語句の知識の定着以外に日常的な語彙を増やす時間をつくる。
- ・教科書の文章などの工夫や効果について継続して意識させ、表現技法についての知識を繰り返し確認し、自らの表現活動に生かす指導を行う。

- ・話したり書いたりすることが苦手な生徒には、手本を示し、短い言葉から話したり書いたりする指導を継続的にを行い、アドバイスをしていく。
- ・普段の授業の中で、自分の考えを書くこと、根拠を明らかにしながら意見を伝え合うことなどの指導をくり返す。
- ・文章で表された数量の関係を式で表現したり、式の意味を読み取り、文字式を用いて筋道を立てて説明したりする活動を取り入れる。
- ・数学の知識や技能を活用する場面として、実生活の中に数学的な事柄を見い出して扱う活動を設定する。数学用語を使って記述したり、発表したりする活動を計画的に取り入れる。
- ・問題を正しく捉え問われていることに的確に解答するように、きちんと文章を読みとり、内容を理解する力をつける。
- ・考えを正しく伝える力をつけるために、自分の考えを文章でまとめて表現する力の向上を目指す。
- ・目的に合わせた実験方法やその結果の予想など、実験計画から結果の分析までを考える授業を随所に展開する。普段の実験で、これら一連の流れについて繰り返し取り組んでいる。しかし、今回の調査結果では、実験結果や考察から、さらに追及するためにどのような実験を組み立て、実証していくかを考えさせることが必要だということがわかった。そこを意識した授業を展開していくよう工夫していく。

○学級経営

- ・児童が自ら学級のいいところや課題を見出せるように、定期的にアンケートを行っている。その結果から学級をよりよくしていくことを目的とした話し合いを行っている。
- ・毎月1回、朝読書の時間に「小学生新聞」を読む機会を設け、記事を紹介したり、感想を交流したりする取り組みを行う。

■大月市教育委員会に於ける今後の取組

低学年から図鑑や本に親しみ、新聞等の図や表を比べて自身の意見を持ち、発信する活動を行っていきます。算数・数学においても式・表・グラフ等を書くだけでなく、口頭で説明する対話的な授業、文字で書き表す活動の機会を十分に確保していきます。

学習の系統性を考え、より上学年への学習内容のつながりを意識したり、子どもが主体的に考え、話し合うことを中心に据え自力解決の時間を確保したり、ペア学習や小グループでの話し合いを重視したり、課題解決学習をより多く取り入れたり等の授業改善を促していきます。「朝学習」として基礎的・基本的内容を繰り返し学習する(読書の時間等も含まれている)時間を設定していたりしますが、その充実をなお一層図っていく必要があります。全般的に文章の読解力向上が課題となっています。

市内小中学校では、それぞれの課題を克服するための独自の取組があります。各校が自ら策定した指導方法改善策に基づき、子ども一人一人を大切にしたい、きめ細かな指導の実現を促していきます。